

## 七、中濱鐵

——詩——

本名富岡誓、身命を賭して戦ふ勇敢な闘士であつた。大阪にギロチン社を創立し、古田、小西、河合其他の諸君と共に運動資金の調達に苦心し、強盗殺人にまで及び、大正十二年捕へられて、三年の未決の後死刑に處された。多くの詩を作り、未決中にも、大阪の祖國と自由社から『中濱鐵著作集』が出版された。文章をよくし、英語をよくし、翻譯もある。

### ▽その日

彼が代議士に

屁上つて 光らうが

落つこちて 消えやうが

彼の政黨が

肥らうが、細らうが

彼の内閣が

頑張らうが 轉ぼうが

俺は やつぱり

俺なのだ

ここに居る

立ン坊が

號外屋に化けて飛んでゐる

鈴を力に

離れまいと

生活は ぶらさがつて泣いてゐる

リン リン リンと

こぼれたる血の滴

黒い涙

権力と黄金の廻し者——

飛行機は高く

威張つて唸つてゐる

自動車は 強く

得意に吼えてゐる

からすが

カア カア 鳴いて行く

鳥は ねぐらへ歸るのだ

俺はやつぱり

俺なのだ  
こゝに蠢く  
黄昏の味  
苦くて辛い  
萬歳の聲——  
噫！

畜生！  
いまに  
今に見ろ！  
覺えてゐやがれ！

『五等何を信ず可き？』

——大正十三年五月十一日總選舉開票を獄中に閉きつゝ——

八、金子文子 — 歌 —

朴烈君と獄中で結婚した人、逆境に育ち、無政府主義者となり、朴烈君と共に捕はれて、死刑の言葉をうけ、死一等減ぜられて無期服役中、大正十五年七月自殺を遂げた。

その『遺稿集』が自我人社から出版されたが直ちに禁止され、世に出るに至らなかつた。自傳も完成されてゐるときが出版の運びに至らない。

▽ ツツヂの花

×  
ギロチンに斃れし人の魂か  
庭にツツヂの  
赤きまなざし。  
×

ブルヂユアの  
庭にツツヂが咲いて居り  
プロレタリアの血の色をして。

×  
ぐんぐんと  
生ひ育ち行く彼の友と  
訣る、日近し、私の悲しみ。

×  
友の服は破れ、  
我に白き襟番號  
悲しきまなざしよ豫審廷の畫。

一度は捨し世なれど  
文見れば  
胸に覺ゆる淡き執着。